

生まれつきの足

五條市立五條東中学校 2年 今西 陸翔

僕の足はみんなと違います。生まれつき両足の指の骨が6本ありました。生まれてすぐに分かりましたが僕が小さすぎたため、初めての手術は1歳6カ月のときでした。母はそのとき、『自分のせいで申し訳ない』と思ったそうです。母のせいではないと分かっていたのですが、なぜ姉や他の人ではなく、自分なのだろうと思いました。

2回目の手術は小学4年生のときでした。スポーツが得意で大好きだった僕はいろいろなことにチャレンジをしていました。すると、1回目の手術をした部分の骨がずれてきたのです。大丈夫だろうと様子を見ていたら足の裏が痛くなって歩くことができなくなりました。不安になりながらも病院に行って検査をすると病院の先生に、「手術をしないとこれから走ることはできないよ。」

と言われました。スポーツの中でも特に走ることが好きだった僕にはショックが大きすぎる一言でした。手術をすれば走ることはできますが、すごく痛いと言き、恐怖と不安の方が大きかったからです。しかし、その気持ちよりも僕の心の中では前のように思いつき走りたいたいという気持ちの方が大きかったので、手術をすることに決めました。

手術は無事に成功しました。しかし大変なのはここからでした。麻酔が切れてひどい痛みで薬も効かず寝られない日々が続きました。最初の1週間は全てベッドの上で過ごしました。やがて、車イスで移動できるようになったとき一人の男の看護師さんに出会いました。その看護師さんは僕の担当の人ではありませんでしたが、毎日仕事をしながら様子を見に来てくれました。母は仕事に行かなければならないので寂しくないように気をかけてくれたのです。日々の生活をサポートしてくれたり、宿題をみてくれたり本当にお世話になりました。そして、看護師という職業は男の人でもなれるということを初めて知りました。

退院後も1か月間ベッドの上で過ごし

ました。食事やトイレは姉に準備してもらい、手を借りて生活をしていました。寝たきり生活が続いたので足はやせ細り、立つことができず、自分に腹が立ちました。ようやく学校に松葉杖で行けるようになりましたが、分団登校や階段の上り下りができませんでした。予定ではもっと早く治っているはずなのに…と落ち込みました。すると、そんな僕をいろいろな人が助けてくれたのです。登校は仕事前の母が送ってくれ、学校の階段は友だちや先生が手伝ってくれました。下校のときは仕事で来られない母の代わりに姉のクラスメイトのお母さんが迎えに来てくれました。特に嬉しかったのは友だちのAくんの助けです。Aくんは自分も足が痛いということもあって僕の気持ちを分かってくれました。全てのことを助けてくれるのではなく、僕にもできることを残してくれる、そんなAくんの思いやりがとても胸に残っています。歩くのが遅くたって待ってくれたし、何をしたら痛くなるのかを理解してくれました。できることを自分なりにすれば良いと学び、運動会は応援で参加しました。

今では足も良くなり、陸上競技部に所属しています。でも、みんなと同じメニューをこなせなくて悔しい思いをすることもあります。これからは自分の足と上手に付き合いながらいろいろなことに挑戦していきたいです。この経験から僕は夢を持つことができました。それは入院生活で出会った、あの看護師さんになることです。僕は同じような状況の患者さんに寄り添える人になりたいです。Aくんが、痛みを知るからこそ僕を上手くサポートしてくれたように、僕だからこそサポートできることがあると思います。最初は何で自分が…と思っていたのですが、今では生まれつきのこの足でよかったと思います。人の優しさを知り、将来の目標を見つけることができたからです。自分の足に感謝し、次は僕が誰かを支えてあげたいです。